

教育効果と地域貢献を高めるためのサービスラーニングの研究
—海外サービスラーニング（カンボジア）のプログラム分析を通して—

A Study of Service Learning to Improve Educative Effect and Regional Contribution
— Analysis of Overseas Service Learning Program —

尾崎 慶太* 山本 秀樹*
Keita OZAKI Hideki YAMAMOTO

抄 録

サービスラーニングのプログラムを構成する要素として、「明確な学習目標」, 「純粋なコミュニティのニーズとの合致」, 「システムのなりフレクシオン」があげられる。本稿では、本学が実施している海外サービスラーニング（カンボジア）のプログラムを、3要素の観点から学生に対する教育効果および活動地域への貢献性を検証し、より効果的なサービスラーニングプログラム構築に向けた課題を検討した。

1. 研究の背景・目的

アメリカの教育改革を背景に開発されたサービスラーニング（以下 SL）は、教室などで知識として学んだことを地域での貢献活動を通して実社会へと応用し、さらにそれら活動から得た学びを教室内学習へと結び付けていく往還的な手法である。

我が国における教育機関での SL 導入は、2002 年の中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」以降積極的に図られてきた。各大学においても SL の科目や SL を所管する部署の設置等がすすみ、研究分野においても、1990 年後半からさまざまな教育効果の検証や実践報告がなされている。

筆者が所属している関西国際大学（以下本学）でも、文部科学省質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）に採択（初年次サービスラーニングの取組—学士課程における複合的・重層的サービスラーニングの展開—ⁱ）されたことを契機として、海外 SL（カンボジア）をカリキュラムに位置付けた。

SL は、その構成要素ⁱⁱを「明確な学習目標」, 「純粋なコミュニティのニーズとの合致」, 「システムのなりフレクシオン」, としている。SL はあくまでも教授法であり、学生の教育のための手法であることはもちろんであるが、地域での活動を通じた学びであることから、地域のニーズと活動内容とが合致した貢献であるという視点も必要となる。つまり、効果的な SL には、学生の教育効果

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

を高めるための仕組み「明確な学習目標」,「システムのなりフレクション」と地域のニーズに基づいた貢献活動「純粋なコミュニティのニーズとの合致」がプログラムに内包されていることが求められるのである。

本稿では、本学で実施している海外 SL のプログラム評価を行い、大学教育プログラムとしての学生に対する教育効果ⁱⁱⁱおよび活動地域の貢献性を検証し、より効果的な SL プログラム構築に向けた課題を抽出することを目的とする。

2. 研究方法

1 方法

2009年と2010年に実施した海外 SL (カンボジア) のプログラムについて、SL の3つの構成要素、①「明確な学習目標」、②「システムのなりフレクション」、③「純粋なコミュニティのニーズとの合致」、を枠組みとして、学生の記録と活動先のインタビュー結果を用いて分析を行った。具体的には、学生の「振り返りシート」を①と②、「活動先のインタビュー記録」を③の観点として検証した。

2 分析の対象

(1) 対象学生と振り返りシート

参加学生のうち2010年に参加した2名の振り返りシートからその学生の変化をみる。抽出する学生2名(2年生)は、所属学科による差異を比較しやすくするため、教員もしくは保育士をめざす学生1名(こども学専攻)及び、社会福祉従事者をめざす学生1名(福祉学専攻)とした。

学生が記入する振り返りシートは、事前学習終了後の振り返り、現地活動中の振り返り、帰国後の振り返りの3段階に分かれている。振り返りの視点としては、活動そのものを改善していくための質問項目、自分自身の行動を振り返るための質問項目に分かれており、さらにグループレベルと個人レベルに分かれている^{iv}。

(2) インタビュー記録

活動小学校の校長、その他教員4名に対して、現地での活動評価を目的としてインタビューを行った。インタビューは、あらかじめ用意していた8つの質問項目に対して、それぞれ5段階評価(1:まったくそう思わない, 2:そう思わない, 3:どちらでもない, 4:そう思う, 5:非常にそう思う)とその項目が具体的にどうだったかを問う、半構造化面接を実施した。学生のグループリーダーが通訳者を通じてインタビューを行い、筆者は補助としてインタビューに同席した。記録は、評価者の発言をメモしながら評価表を作成し、インタビューの様子をビデオ撮影した。

具体的な質問項目は、大項目を①「学生の関わりについて(学生の取り組む姿勢)」と②「プログラムについて(SL活動全般)」に設定した。さらに①について、「Q1子どもの学力に応じた活動をしていたか」「Q2子どもが学校に来て学ぶことの楽しさや喜びがもてるような働きかけをしていた

か」「Q3 チームでまとまって活動していたか」「Q4 学生の活動は子どもの役にたったか」、②について「Q1 算数の支援は小学校にとって有益であったか」「Q2 給食作りは小学校にとって有益だったか」「Q3 教材の支援は小学校にとって有益だったか」「Q4 全体を通じてプログラムは地域のニーズにかなっていたか」の質問項目を用意した。

3. 事例概要

1 海外 SL (カンボジア) の概要

2009年から実施している海外 SL (カンボジア) は「特別研究Ⅱ (海外サービスラーニング・カンボジア)」(2単位)として科目設定している。全学共通で行っている「初年次 SL」の上位プログラムでもあることから、履修対象を2年生以上の全ての学生とした。

活動内容は、「カンボジアの貧困層における低学力児童の支援を目的とした、補習・教材の支援の実施」とし、具体的には、「①実践では市販の九九カードや計算ドリルを活用することで効果的な学習を支援していく、②使用教材を活動した小学校に寄贈するため、事前活動として教材購入資金の確保に向けた募金活動にも取り組んでいく」とした。

なお、活動地域の選定及びコミュニティパートナーとの活動内容に関する調整は、事前にプログラム担当教員と本学 SL 室コーディネーターが渡航し準備を進めておいた^v。活動内容は、受け入れ先である小学校長やその他教員と協議・調整した結果、算数の学習支援をメインとした内容となった。

2 活動内容および参加学生

本プログラムの学習目標を「カンボジアの地域の課題(生活ニーズ)を発見し、グループで協力して解決する能力を身につける」とした。あわせて、KUIS 学習ベンチマーク^{vi}の中から獲得をめざす、「知的好奇心」、「多様性理解」、「情報収集/発見力」、「思考/判断力」の4つを設定し、プログラムに則した具体的能力を提示した^{vii}。

活動内容は、事前学習・活動、現地活動、事後活動の3部構成とした。事前学習では、15回の授業(事前学習)を展開し、カンボジアの概況・歴史・教育・社会問題等について学習した^{viii}。具体的には、国際協力団体に所属している外部講師によるワークショップ、クメール(カンボジア)語学習、現地活動プログラムの立案、指導案作成及び教材作成、模擬授業である。また、現地活動にかかる費用を確保するため、学内での募金活動やフリーマーケットなどを行った。

現地活動では、小学校がメインの活動地域となる。内容は、算数の学習支援^{ix}、レクリエーション、給食作り、小学校・寺院の清掃活動を実施した。あわせて、カンボジアの歴史や背景を学ぶためのツアーや、現地の生活を実体験するためのホームステイ体験もプログラム化している。

事後活動では、学内での活動報告会や大学祭でのプレゼンテーション、活動報告集の執筆に取り組む内容となっている。

参加学生の内訳は、2009年度9名(教育福祉6名、人間心理1名、ビジネス行動2名)、2010

年度 19 名（教育福祉 17 名，人間心理 2 名）である。本プログラムは全学生を対象としているが，活動内容が主に算数の学習支援であることから，教育福祉学科学生の参加割合が高い。

4. 結果

1 学生の振り返りシートから

(1) こども学専攻 A 学生

A・B 学生ともに 2 年生であり，科目の履修状況はいわゆる大学初年次に履修する基礎的な教養科目とその学科・専攻に所属する専門的な科目を若干履修している状況である。

まず，事前学習後の振り返りに着目する。教員をめざす A 学生は，プログラムの活動内容が算数の学習支援ということもあり，一つ目に「初等算数科教育法」をあげている（表 1 参照）。具体的には，「様々な解き方や自分たちで説明したりすることを学んだので，算数指導という部分で一般的に生かせる」と記述している。事前学習では教材作成，指導案の立案等，小学校での授業展開に関する準備を進めているため，同時期に受講している「初等算数科教育法」での知識や技術を活用しようという意図がみられる。また，「異文化コミュニケーション論」という科目をあげ，「日本と違う文化を正面から受け取れる」と記述している。この科目は，教養科目であり学生自身の興味関心から履修する選択科目となっている。海外 SL（カンボジア）に参加する何らかの動機につながっているとも考えられる。

次に現地活動中であるが，表 1 に抜粋した記述は，A 学生が活動中にメイン担当として算数の学習支援をした日の記録である。自分自身が計画した指導案のもと授業展開が成功したようである。ここでの成功体験は，「今までの振り返りを通して，思ったことや工夫点を注意」していることとつながっている。すなわち，振り返りがなければ次の実践へとつながらなかったと読み取ることができる。さらに，「『教える』ことの難しさだったり，配慮する点など前もって考えておく必要があるのは指導案だけではない」と続けて記述している。単に授業の計画を立てるだけでなく，子どもに教えるための工夫や周りに対する配慮など，実践を通した気づきがみられる。

最後に事後の振り返りである。A 学生は，事前学習後に活動内容との関連性から「初等算数科教育法」をあげていたが，事後では教科教育法ではなく，いわゆるジェネリックスキルに関する記述をしている。具体的には，「授業で学んだ経済のことだったり，日本と他国の違いだったりを経験でき，歴史など興味のなかったことも活動を通して考えることができ」，「人と人とのコミュニケーションを上手く使い，今回学んだ伝えることの難しさなども含め，プレゼンテーションや発表」につなげていくと記している。現地で様々な活動をしていく中で，教科教育法という方法論ではなく，多様性理解や人とのコミュニケーションの重要性など，目標としていた KUIS 学習ベンチマークの記述に変化していることがわかる。

(2) 福祉学専攻 B 学生

A 学生同様，まず事前学習後の振り返りからみることにする。B 学生は，社会福祉士養成カリキ

ュラムに則った科目を履修してきているため、A学生のような活動内容と直接的に結びつくような科目（教育に関する科目）を履修していない。そのこともあり、事前学習後の振り返りには、「ボランティア論」での「自発性」について書くだけにとどまっている。ただし、B学生は学習教材として使用したテキストの中から特にストリートチルドレンに着目しており、「カンボジアの背景をしておくことによって、なぜこの子どもたちはストリートチルドレンなのかを理解することができる」と記述している。事前学習後の段階では、小学校の活動よりもカンボジアの社会問題に目を向けていることがわかる。

現地活動中での振り返りは、A学生同様に授業をメインに担当した日の振り返りの抜粋である。ここでは、「教えることの難しさ、そして教えることの楽しさを学んだ」と記述している。B学生にとって、子どもたちの前で授業をすることや、人に何かを教えることは初めての経験であったが、本人が感じた率直な感想であろう。さらに、B学生が感じた反省点を自分自身の振り返りだけでなく、グループの中で共有しようとする行動が記録からみてとれる。

事後の振り返りでは、「集団生活の大変さや、他人の気持ちを考えた行動や誰かのために自分がどうすべきか」について学びがあったと記述している。事前学習後の振り返り段階記入した、「ボランティア論」での「自発性」が、現地活動を経験し、自発性に加えて他者を考えた行動にまで変化してきている。

さらに「グループや全員で話し合いをしたことで、以前よりグループワークの能力は身に付いたと思う」とある。このプログラムの学習目標である「問題解決能力」が向上したと読み取れる記述であろう。この理由として、特に現地活動では子どもの学力向上（テストの成績を向上させること）をひとつの目標として取り組ませている。そのため、活動中は学生らが工夫を凝らし、どのように関わっていったらよいかを毎日1時間半から2時間かけて活動の振り返りをグループでおこなっている。与えられるのではなく、学生自らが直面している課題に対して解決策を模索する構造化された振り返りが、いわゆるジェネリックスキルの「問題解決能力」を学生自身が獲得したと実感できるのである。

(3) A・B学生の比較

次に、2名の学生を比較しながらみていくこととする。根本的な部分として、学生が所属する学科・専攻の違いが影響されている。A学生はこども学専攻という小学校以下の子どもたちの教育・保育（小学校教諭、幼稚園教諭、保育士）を養成する専攻に所属していることから、上述したような「初等算数科教育法」や子どもたちとのコミュニケーションに関する記述を多くしている。一方B学生は、社会福祉士を養成している専攻に所属していることから、小学校での算数の学習支援はイメージしにくいと思われる。そのため、ボランティア活動としての自発性や他者の気持ちを考えた行動に関する記述が多い。そなわち、A学生は子どもを対象とした記述が多く、B学生は他者を配慮した行動や貢献に関する記述が目立っている^x。全学生を対象とするプログラムであることから、参加する学生のめざすところは、同じプログラム内容であっても捉え方が違うということがわかる。

次に両者に共通してみられる点をあげておく。それは、活動後の振り返りから読み取れることであるが、具体的科目につなげていくあるいは応用していくという記述ではないという点である。両者とも、コミュニケーションであったり、グループワークの能力であったりといわゆるジェネリックスキルに関するものとなっている。おそらく、カンボジアという異文化に触れ、日本とはまったく異なる環境で3週間の活動を行うことで、小学校での算数の学習支援の枠を超えた学生自身の発見や感動があったことも影響しているだろう。またこのことは、海外 SL (カンボジア) の学習目標としていた問題解決能力と関係している。このプログラムが、明確な学習目標を設定していることと、事前学習後、現地活動中、現地活動後の3段階かつ2レベル(個人とグループ)に振り返りを構造的に位置づけていたことが、学生の学びにつながっていると考えられる。

(表1) こども学専攻 A 学生

事前学習後 ＜活動に生かせる科目＞	初等算数科教育法：様々な解き方や自分たちで説明したりすることを学んだので、算数指導という部分で全般的に生かせると思う。 異文化間コミュニケーション論：異文化理解が深まったので、驚きもあるだろうが、日本と違う文化を正面から受け取れると思う。
現地活動中 ＜日々の活動の振り返り＞	今までの振り返りを通して、思ったことや工夫点に注意しながら、「楽しみながら学ぶ」というのを崩さず授業に臨んだし、イメージしたように進められ、成功した。「教える」ことの難しさだったり配慮する点など前もって考えておく必要があるのは指導案だけではないということ。
事後の振り返り ＜現地活動を通して学んだこと＞	カンボジアの様々な伝統的なものと触れたことで、歴史を知ることができた。小学校での活動では自分たちが先生となって教え、伝えることの難しさはもちろん、どのようにして伝えてくのかということを考え、一つひとつの大切さを学べた。言葉は通じなくても子どもたちの環境適応力はコミュニケーションをとっていく上ですごいと思った。また、積極さの大切さも学べたし、人と人とのつながりの大事さも学べた。
事後の振り返り ＜今後を生かしていく科目＞	異文化間コミュニケーション論：自分が住む日本と文化はもちろん生活なども違う国に行き、授業で学んだ経済のことだったり、日本と他国の違いだったりを経験でき、歴史など興味のなかったことも活動を通して考えることができた。 人と人とのコミュニケーションを上手く使い、今回学んだ伝えることの難しさなども含め、プレゼンテーションや発表で相手のことも考えたものを作れ

(表2) 福祉学専攻 B 学生

事前学習後 ＜活動に生かせる科目＞	ボランティア論で学んだ自発性である。また、現地に行ったとき、観光客目当てで近づいてくるストリートチルドレンに正直驚くかもしれない。カンボジアの背景を知っておくことによって、なぜこの子どもたちはストリートチルドレンなのかを理解することができる。
現地活動中 ＜日々の活動の振り返り＞	教えることの難しさ、そして教えることの楽しさを学んだ。自分の中では今日は自己満足である。しかし、反省点はたくさんあり、その反省点を減らし、よいところをグループとして増やしていきたい。
事後の振り返り ＜現地活動を通して学んだこと＞	カンボジアの活動を通して、カンボジアの歴史について学んだり生活体験をしたり、いろんなことを体験した。その中で、集団生活の大変さや、他人の気持ちを考えた行動や誰かのために自分がどうすべきかということについて、たくさん学ぶこと
事後の振り返り ＜今後を生かしていく科目＞	1年次に老人福祉論や介護概論で行ったサービスマニエール活動と関連していると思った。地域貢献や遊び方等を提供することができた。 また、現地ではグループや全員でたくさん話し合いをしたことで、以前よりはグループワークの能力は身についたと思う。授業でグループワーク等があれば、率先してやっていきたい。

(表1・2ともに学生の振り返りシートより筆者が抜粋しまとめた)

2 活動地域のインタビューを通して

現地活動後に活動評価のためのインタビューを行い、その結果をまとめたものが表3になる。ここでは本プログラムの活動内容と小学校側のニーズとが合致しているかという観点で見ていくことにする。

まず、2009年は主に小学校長からのコメントとなっている。プログラムの実施初年度ということもあり、若干お客さんの存在になっていることは否定できない。多くが「すばらしいと感じている」「参考になった」「役にたった」という表現をしている。また、参考になった、あるいは役にたった部分は、活動中に学生らが使用していた教材や指導方法の目新しさに興味を示していると考えられる。小学校側にとって本学は初めての外国との関わりであり、来てくれるだけで歓迎するという姿勢の表れとも受け取れる。また、外国人が来たという物珍しさやある種のイベントと間違われることもある。実際、2009年の活動時には日本人が来ているという情報が地域住民に流れ、活動の様子を見に来られていた事実もある。

算数の学習支援に関しては、「*計算力は社会に出るために必要なものである。お金を騙し取られることもめずらしくないので、子どもたちにとって算数は必要である*」と評価をいただいた。小学校での活動内容は、少なくとも小学校の子どもたちのニーズと合致していると推察できる。また、教材の支援も小学校教員にとっては有益なものとなっている。このように2009年の評価は、形式的なものになっている点もあるが、算数の学習支援や教材の支援などプログラムが小学校に対して有効であると確認できる。

次に2010年の評価では、小学校長以外にもほか4名の教員にコメントをいただいた。2010年は2009年とは違い、活動期間中に小学校教員を招き、学生らの活動風景を見学してもらうような交渉を行った。これは、2009年の評価をもとに、活動が一過性のイベントとにならないような工夫、特に地域住民との協働活動を意図したものである。2009年と同様に「参考になる」や「役にたった」というコメントが見受けられる。しかし、2010年は「徐々に難易度を変化させ、子どもが興味をもてる内容となっていた」や「教材を使った支援や子どもとの仲間作りは参考になる」など、具体的活動内容や方法論の評価コメントがある。小学校教員が実際に学生らの活動の様子を見ることで、具体的にどの部分がどのように参考になるかという点につながり、上述した評価になっていると思われる。

さらに、「*寺院の清掃活動など小学校以外の活動をしていて、地域の人が興味をもてるプログラムとなっていた。地域の人々から『今年も日本人が来ているか?』と聞かれる*」ようになるなど、小学校内だけでなく周辺に住む地域住民にこの活動が周知されつつある。

自由コメント時には「*小学校教員に対する教育をしてほしい*」という現職教育の要望があった。カンボジアは発展途上国であり、教育分野はまだ十分に整備されていない現状がある。教育分野の中でもハード面（小学校建築）はここ数年整備されてきているが、教員養成の面では問題点を抱えている。このような背景がありこういった要望に反映されているだろう。そして、小学校教員が、学生らの子どもたちに対する学習支援の様子を目の当たりにし、使用する教材や学生らの指導方法

が子どもたちにとって良い効果をもたらしていると感じ取られたこともその要因のひとつであると考えられる。つまり、学生らの貢献によって新たなニーズが表出したことになる。SL の構成要素である貢献活動とコミュニティのニーズとが合致しているといえるのではないだろうか。

(表 3) 活動先へのインタビュー結果

	2009	2010
学生のかかわりについて (学生の取り組む姿勢について)		
1	参加学生の構成は、全く出来ない子ども、学力がある子どもの混合であった。理由は、小学校の指導方法として学力のある子どもが出来ない子どもに教えるというスタイルをとっているため。学力のある子どもにとっては物足りないかもしれない。また、短い期間でやることは難	子どもと学生との距離が良かった。友達同士の関係で指導をしていた。授業中に間違っても厳しくするのではなく、許して分かるまでしっかりと教える姿があった。徐々に難易度を変化させ、子どもが興味をもてる内容となっていた。
2	今までに教えたことのない方法で実践をされていた。授業の中に遊びを取り入れていることに興味をもった。それにより、子ども達は楽しそうにしていた。こどもとの接し方について参考になった。	子どもたちが2週間継続して参加していたことは、楽しさや喜びがもてていたということ。3名ほど2・3日欠席したが、それは通常では7時から始まり11時には帰宅するので、この活動の時間帯に慣れなかったため。教育だけでなく社会につながる活動ができていたと思う。
3	普段は能力別にクラス分けをしていないが、能力別に指導する方法も良いと思う。また授業展開もよく、自分自身(校長)や他の先生方にも参考になった。	子どもたちをしっかりとまとめ、協力して指導していた。テストなども実施し、その結果を活動に反映させている。
4	お金をかけて活動していただき、感謝している。国籍が違っても、子どもと一緒に活動ができていたので、すばらしいと感じている。また、自分自身(校長)	学校側として、こども側としてもとても役にたっている。
プログラムについて (サービスマニエール活動全般について)		
1	算数、特に計算力は社会に出るために必要なものである。お金を騙し取られることもめずらしくないので、子どもたちにとって算数は必要である。	子どもとの関わり方がよく、また教材もよかった。教材を使った支援や子どもとの仲間作りは参考になる。
2	すごく感謝しているし、興味をもって見ていた。お菓子などを渡すだけでもありがたいが、ご飯を作って提供することはすばらしいことだと思っている。	食事を出すことは良いことだと思う。カンボジアでは学校で食事を出すことはない。子どもたちとともに食事することでコミュニケーションが取れ、家族のような関係性になる。
3	コピーをとって他の先生方と共有したい。遊び道具ではないので、小学校の教育力につながると思う。	使っていた教材はクオリティが高く、今後ぜひ授業に役立てていきたい。
4	植樹は地域に繋がる活動であると思う。来年以降、こちら側(小学校)も積極的に関わっていきたい。	寺院の清掃活動など小学校以外での活動をしていて、地域の人が興味をもてるプログラムとなっていた。地域の人々から、「今年も日本人が来ているか？」と聞かれるようになった。言葉が通じなくても、心が通じ合っていると感じてい

(インタビュー記録より筆者が作成)

5. 考察

これまで、SL の 3 つの構成要素の観点から学生の振り返り記録と活動地域のインタビュー結果を検証し、プログラム評価をおこなってきた。あらためて海外 SL (カンボジア) のプログラムがもたらす学生への教育効果と活動地域への貢献性を検討し、発展的プログラム構築に向けた課題を提示する。

1 SL の 3 つの構成要素からの検討

(1) 教育効果

SL はあくまで教授法であり、大学教育の一環として位置づけることが肝要である。SL のプログラムには、明確な学習目標の設定が必要であり、本学のプログラムにおいても、シラバス上に学習

目標と、獲得を目指すジェネリックスキルでもある KUIS 学習ベンチマークを明示した。さらに、現地活動が単なる学生の思い出づくりにならないよう、事前学習・活動を通して、授業に参加する子ども全員の算数の成績を向上させるという目標を共有化した。この目標を達成させるために、学生らは授業に参加する子どもたちを能力別にクラス分けし、それぞれが担当するグループが責任をもって主体的にそのクラスの能力に応じた授業展開をおこなった。授業中の子どもの様子を細やかに観察し、子どもたちが意欲的に学べる教材を開発し指導方法を改善していった。中間テストで効果を測定し、最終テストに向けた計画を練り直すことで、結果的に現地活動の目標を達成することができた。

このように目標を明確にし、構造的・意図的な振り返りをおこなったことで、A・B 学生の事例にもみられるように、とりわけジェネリックスキルの獲得に効果があったものと考えられる。

一方で、アカデミックスキルの向上が明確に見えないというのも事実である。A 学生の事例からもわかるように、事前学習後の段階では、科目で学んだ知識や技術を応用しようという記述がみられるが、活動後にはジェネリックスキルに比重がかかった記述である。これは、海外 SL（カンボジア）の構造的な問題点であり、カリキュラム全体のプログラムの位置づけや、振り返りの視点などを再検討していく必要を示している。

(2) 活動地域との協働

本プログラムでは、地域住民との協働を意識し、とりわけ活動地域の小学校に勤務する教員の参加を促す活動展開を行った。海外で実践するプログラムは、地理的・経済的要因から継続的に現地を訪問し活動を展開していくことは難しい。その解決策の一つとして、地域住民を巻き込んだ形で活動を展開していくことが重要な意味をもつ。活動の継続性という観点から考えて見れば、本学が活動をしていない時期にも、活動地域の小学校に勤務する教員によって、より望ましい方法や教材を使った授業を続けていけることが、地域のニーズを充足することにつながるであろう。

2010 年の活動では活動地域に勤務する小学校教員が参加したことで、「小学校教員に対する教育」といった新たなニーズも生まれた。

地域への貢献活動は提供する側の認識だけで実践しがちであるが、活動する中で生じる、あるいは当事者から要望として出てくる新たなニーズに地域住民とともに継続的に取り組む活動へとプログラムを改善していかなければならない。地域のニーズにかなった継続的な貢献活動の実現が、本来の SL 活動であり、学生と地域住民との協働プログラムの在り方と言える。

2 今後の課題

以上、海外 SL（カンボジア）の事例をもとに、SL の 3 つの構成要素の観点から学生に対する教育効果および地域のニーズに基づいた貢献活動についてそれぞれ言及してきた。ここでは、発展途上にある海外 SL（カンボジア）プログラムの課題を提示しておきたい。

一つ目は、アカデミックな学びと SL 活動の体系化である。このプログラムは全学科共通の 2 年

生以上を対象にしている。2年間とはいえ、学生が学んできたアカデミックスキルはそれぞれの学科のカリキュラムによって異なり、上級学年においてはなおさらである。それら学びの蓄積を SL のプログラムにどう接続し、体験を通して高め、さらなる学びの発展に向けてどのように結び付けていくのかについて、学士課程を通じたカリキュラム展開を包括的に捉えた検討が求められる。また、A 学生のように、事前学習後の段階で学科での学びを記述していたとしても、現地での活動を通じた振り返りでは、ジェネリックスキルを中心とした記述となっていた。これは、SL 活動が海外であることのインパクトも少なからず影響しているものと推察される。これらを踏まえると、海外で実践することの難しさもさることながら、学生にとってのイベント旅行とならないための学習目標やプログラムの構造、振り返りの方法をさらに洗練していくことが必要となる。

二つ目は、地域住民との協働のあり方である。活動先のインタビューからもわかるとおり、2年間で若干の変化は見られるものの、まだ、相互の信頼関係に基づいた関係性の構築には至っていない。本学では、2008年から本プログラムの計画を始め、2009年実施に向け、活動小学校や現地協定大学と継続的に関わり、調整を図りながら活動を展開してきたが、地域住民にとって年に1度のイベントとして捉えられるのであれば、真の貢献活動とはいえない。2010年のプログラム改善や評価では、住民との協働の可能性が示唆されたが、2011年に向けて、プログラムの方向性をどのように定め、活動内容を改善していくかがポイントとなってくるだろう。そのためにも、活動小学校や現地協定大学との調整をもとに、地域住民の主体的な協力を促し、引き出していけるような関係性の構築を進めていかなければならない。

これら課題をもとに、SLの3つの構成要素をバランスよく機能させることで、さらなる学生の教育効果および地域への貢献性が期待できるSLプログラムへと発展していくだろう。

引用・参考文献

i 教育 GP「初年次サービスラーニングの取組」（関西国大学 HP）

<http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/extension/gp-sl/index.html>

ii SLに関する主な著書として、倉本哲男（2008）『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究-サービス・ラーニングの視点から-』ふくろう出版、山田明（2008）『サービス・ラーニング研究-高校生の自己形成に資する教育プログラムの導入と基盤整備-』学術出版会、などがある。ここでは、倉本（2008）が、北米の様々な機関が示す多様 SL の定義を総括する形で用いている「北西部 SL（Northwest Service-Learning）」の示す SL の3つの構成要素を援用する。

iii 山本秀樹（2010）「ジェネリックスキル獲得に向けた大学教育プログラムの研究-海外サービスラーニング（カンボジア）における実践から-」『関西国際大学研究紀要』第11号、47-55において、2009年に実施した同プログラムの検証を試みている。特に学生が獲得するジェネリックスキル焦点をあて、本学が示す「KUIS 学習ベンチマーク」をもとに分析をおこなった。結果として、多様性理解や問題解決能力の獲得に寄与できることが示唆された。

iv 前掲書 v 山本秀樹（2010）を参照のこと

v 本学は、カンボジアの Norton University と協定を締結しており、活動先と調整する際の仲介的役割を担っている。

vi 2006年より「KUIS 学習ベンチマーク」を制定し、具体的な態度特性や汎用的技能を示した。

(<http://www.kuins.ac.jp/kuinsHP/about/target/benchmark.html>)

vii 前掲書 v 山本秀樹 (2010) を参照のこと

viii 工藤律子 (2008)『子どもたちに寄り添う・カンボジア・薬物・HIV・人身売買との闘い』JULA 出版を学習教材として使用。

ix 小学校での学習支援では、すべての子どもの算数の成績を 150%向上させることを目標として共有化した。これは、現地活動が単なるイベントとして終始するものではなく、課題をもった問題解決型の活動として学生に意識させている。また、このことは事前学習時にルーブリック（科目の成績の評価基準）に明示し、学生に周知させている。

x 福祉学専攻に所属している B 学生は、現地活動に行く時点では、社会福祉士養成課程の「児童福祉論」を未履修であり、この科目を履修した後に本プログラムに参加した場合には、振り返りシートに記述する内容が変わってくる可能性があることを言及しておく。

Abstract

"Clear learning objectives" "Match the pure needs of the community" "Systematic reflection" are components of Service Learning Program. In this paper, Based on the Overseas Service Learning program (Cambodia), to analyze the regional contribution and educative effect from viewpoints of three components, for constructing a more effective Service Learning Program.